

# 通訳者に依頼する立場から、「通訳」についての一考察

A Study of Interpretation From the Client's Point of View

菅山明美

Akemi SUGAYAMA

**Abstract:** Although I have been working as a TV producer and have had many opportunities to work with translators on the set and in business negotiations, I still feel difficulty when communicating with non-Japanese speakers with the assistance of translators. It is not easy for me to make myself understood exactly by my translator in the first place. Even if I think I have explained all the contents to my translator, there is always the chance of misunderstanding. When I hear the interpreted dialog in English, I sometimes realize a slight difference from what I have meant. These slight differences can develop into a big problem in the end. When the interpretation is in an unfamiliar language, there is no way to prevent the misunderstanding. After realizing the difference between interpreted conversations and normal mother-tongue-based conversations through an interpretation-translation course, I became aware that there were not many clients who had enough knowledge of interpretation and how it functions. It is necessary for clients to know the difference in order to work together to accomplish tasks with translators. In this paper, I examine what clients feel about translators, what clients expect of translators, and what clients need, using an example of shooting documentaries. I interviewed four TV directors and studied techniques to work better with translators on the set.

## 1. はじめに

筆者は、テレビ番組の制作現場でディレクターとして働きながら、同時に、異文化コミュニケーション研究科の博士課程前期課程に所属し、環境コミュニケーションを専門的に学ぶ者である。

筆者の職場である、テレビ番組の制作現場では、ロケや契約などで通訳者を依頼する機会が多いが、つねにその仕事の難しさを感じてきた。まず、通訳者に自分の意思を正確に伝えることが難しい。前後のニュアンスも加えて伝えたつもりになるが、通訳現場に立ち会っていると正確に伝わっていないことに気づくことがある。英語の場合その時々には修正することも可能なのだが、それ以外の言語では気づく術もない。

以上のような意識をもちながら、異文化コミュニケーション研究科に入学した筆者は、専門である環境コミュニケーションだけでなく、通訳翻訳研究の授業も受ける機会を得た。後者の授業、とくに「通訳翻訳特論」を受講して、再認識したことは、通訳が成功するためには、発注者側の「通訳」に対する知識と理解が必要であるという点だ。通訳者を介した仕事は、通訳者と発注者の意思の疎通が図られることによって初めて成立するのである。

この研究ノートでは、通訳者に通訳を依頼する人たち（発注者）が、通訳者をどう感じ、何を求めているのかを整理してみたい。テレビ番組のディレクター、4名にインタビューを実施し、その結果に筆者の経験を加えて「通訳者を生かす技術」について考える。

インタビューでの質問項目は以下の5点であった。①通訳者依頼経験、②通訳者として選ぶのは「現地コーディネーター」か「日本人コーディネーター」か、③日本語の理解力と語学の技術力どちらがたいせつか（ここでは「理解力」とはディレクターが発話する日本語を正確に理解する力で、「技術力」とは日本語以外の言語に関する文法や語彙などのいわゆる語学力をさすこととする）、④トラブル、困ったことについて、⑤通訳者にもっとも必要なものはなにか。

ここでとりあげるケースは、テレビ番組の制作現場であり、この場合、通訳者を依頼するのはほとんどが海外ロケにおいてである。地域は世界中にわたる。ロケで通訳者はコーディネーターと呼ばれ、事前取材から取材依頼、ロケでの通訳までが仕事である。通常の通訳業務より広範囲な仕事になるが、需要は多く、各国にこの分野の仕事を専門としたり得意としたりする通訳者がいる。現地に住んでいる日本人と日本語を外国語として理解する現地の人のケースがあり、特殊な事情がないかぎり選択はディレクターが行う。ドイツでは～～さん、ケニアでは～～さんというように、テレビ制作現場で有名な通訳者もいて、番組の「出来・不出来」は通訳者にかかっているといっても過言ではなく、通訳者の選択はディレクターにとって大きな問題である。通訳者は現場で基本的には双方向での逐次通訳をする。

## 2. ディレクターへのインタビュー

5名（筆者を含む）のディレクターは33～43歳で、経験は10～20年。通訳者依頼経験は、のべ36回、20カ国。2名は英語の場合は通訳者を必要としない。

全員が通訳者を介した仕事については難しさを感じていた。まず、共通するのは通訳者探しの難しさであった。テレビ番組の制作現場において優秀な通訳についての情報はファイル化されていないのが実情である。仕事が単発であることと、ジャンルがその時々で異なること、時間的な制約が多いことによって情報の蓄積が困難なためである。

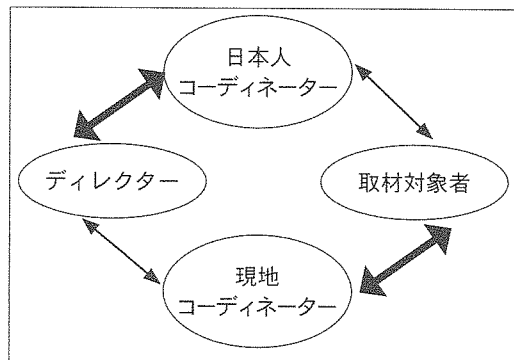
### 3. 調査の結果と考察

#### (1) 通訳者として選ぶのは「現地コーディネーター」か「日本人コーディネーター」か

日本人コーディネーターを選ぶ	3
現地コーディネーターを選ぶ	2

「日本人コーディネーター」を選ぶ理由には、時間や約束、労働の感覚に文化的ギャップがないこと、日本語の表現力や理解力があることが挙げられた。「現地コーディネーター」を選ぶ理由には、現地での交渉やコミュニケーションが円滑なことがあげられている。ここには、「ディレクターと通訳者」のコミュニケーションを優先するか、「通訳者と取材対象者」のコミュニケーションを優先にするかといった違いがある。日本人同士、現地の人同士のほうがコミュニケーションをとりやすいことは、井出（2006, pp. 19-27）も指摘するように、メタ・コミュニケーションやコンテキストにおいて、それぞれの言語にルールがあり、それを身につけることは時間がかかるということに理由がある。日本人コーディネーターを選ぶディレクターは、「ディレクターと通訳者」のコミュニケーションを優先し、現地コーディネーターを選ぶ場合は、「取材対象者と通訳者」のコミュニケーションを優先しているのである（図1参照）。

図1 どちらのコミュニケーションを優先するか



では、ディレクターは通訳者をどうとらえているのだろうか。日本人通訳者を選ぶディレクターは、通訳者には正確に自分の意思を伝えたいのである。そこには、日本語のコンテキストも読んでほしいという要求もある。だからこそ、日本人通訳者を求める。もし、日本語のコンテキストを含めた通訳が可能であれば、日本人通訳者でなくともまったくかまわないという回答にも通じる。この場合、ディレクターにとって通訳者はかぎりなく自分に近い存在である。ディレクターにとって通訳者は「自己」であり、他者は取材対象者である（図2参照）。一方で、現地通訳者を選ぶディレクターの場合は、「自己」はあくまでも自分一人であり、他者は「現地通訳者＋取材対象者」である（図3参照）。現地通訳者を選ぶディレクターに共通したのは、異文化地域に入るのであるから、日本と同じ感覚で取材やインタビューを行うのは不可能だという覚悟である。現地文化の中に身を委ね、その結果できあがったものを受けとめようという姿勢を感じた。ディレクターにとっては、現地通訳者も取材対象者も、自己という壁の向こうの他者である。この場合、取材対象者は、通訳者の後方に位置するので、図2の場合よりも、ディレクターにとって遠い存在となる。

図2 日本人コーディネーターを選ぶ場合

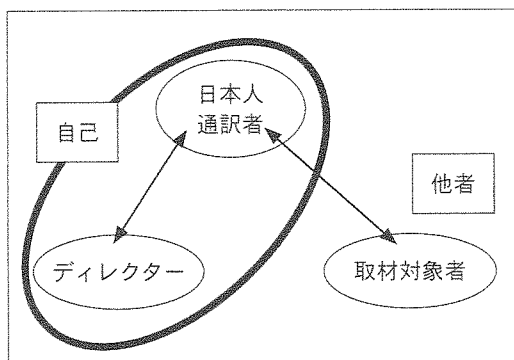
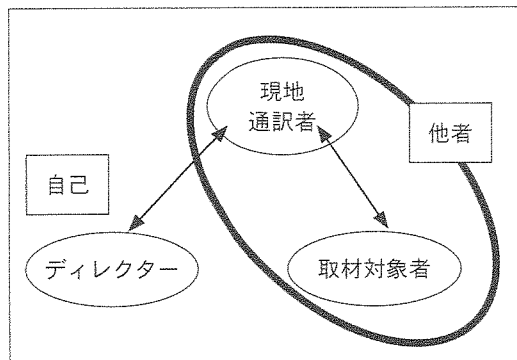


図3 現地コーディネーターを選ぶ場合



では、日本人通訳者を選ぶディレクターが思い描くように、通訳者は自己になりえるのであろうか。通訳者に自分の意思をそのまま伝えることができ、自分の思いどおりに通訳してもらえた時に、満足のいくロケができたと感じると全員のディレクターが述べている。この時、通訳者はディレクターにとって、非常に自己に近い存在に感じられるのである。しかしあくまでも、通訳者は他者である。経験も価値観も違う他者に、意思や感覚をコピーすることはできない。ディレクターが意思を上手に伝え、通訳者が正確に受け取ったとしても、通訳者から発話されるのは別のことばであるはずである。

ときには、他者の気持ちを察するのにたけた通訳者が、ディレクターの意図を読み取りながら通訳する場合がある。このとき、ディレクターは、まるで自分自身が対象言語を操っているような感覚になり、成果も大きいだろう。ディレクターと取材対象者のどちらにも負荷の少ないこの状態が理想の通訳である。この時、通訳者は自身の存在を消し去っているともいえる。

発注者はこれで満足であろう。しかし、通訳者はどうか。通訳者にも自己がある。通訳は、外国語習得という大きな努力の上に成り立った専門職である。それなのになぜ、通訳するときには、自己を消し去らなければならないのかと疑問が残る。発注者に通訳とはどういうものかという知識があれば、通訳者が一方的に奉仕するのではなくお互いに尊重し合った関係がつけられるのではないかと筆者は考える。

## (2) 日本語の理解力と語学の技術力どちらがたいせつか

日本語の理解力 5 (内、「日本語の表現力」と言い換えた者 2)

語学の技術力 0

全員が「日本語の理解力」を選んだ。発話した日本語が正しく理解されることを求めている。そこには、ことばの意味だけではなく、込められた意図や日本語のコンテキストを読みとるということも含まれていた。

さらにその内の2人は、日本語の表現力だと言い換えている。この場合は、日本語以外のことばから日本語への通訳ということであるから、日本人通訳者の場合は、外国語から母語（日本語）へとなり、現地通訳者の場合は、母語から外国語（日本語）へ通訳した場合の表現力ということになる。たとえば、取材対象者が、感動や怒りなどの感情を伝えようとしている場合、それがどんな感情なのかということまでを含めた日本語への通訳を求めているのである。

ここで、なぜ通訳者の表現力がディレクターにとって必要なのかを考えたい。インタビューであげられた表現力不足の例には、取材対象者が2分間にわたって話したにもかかわらず、通訳者が一言で済ます場合がある。その後、2分間に何が話されていたのか疑問に思い通訳者に尋ねたが、通訳者は、発話内容は理解しているが日本語で表現することができずに謝るだけというものもあった。レベルは違っても、このような例は数多くあり、起点言語で行われた表現を忠実に通訳できるかどうかのたいせつさを感じた。

今回のインタビューで、この「表現力」という部分がテレビ番組の通訳では肝要であると考えた。テレビ番組は人の感情を扱う。ドキュメンタリー番組では、取材対象者の「ことば」が番組の柱になる。しかし、この「ことば」を引き出し、撮影するのは難しい。日本人を取材する場合でも、カメラが構えているという緊張した状況のなかで心の奥底にある、できれば話したくない気持ちをことばにしてもらうのはたいへんである。どうしたら本音で語ってもらえるか。信頼関係をつくり、状況を整え、時間をかけて、ある時にはディレクター自身が自分をさらけ出して取材対象者に対峙しなければ決して本物の「ことば」は撮影できない。この作業を言語の違う異文化のなかで行うのであるから通訳者が担う役割の大きさと難しさは言うまでもない。

取材対象者の前にカメラが据えられ、照明が当てられる。通訳者がカメラの横に座り、ディレクターはさらにその後ろに座る。インタビューの開始である。最初はごく簡単な質問から。たとえば「陶芸を始めて何年ですか?」、「やっていて一番難しいところはどんなところですか?」。通訳者が訳し取材対象者が答える。「20年です」、「みんな難しいのですが、かたちを整えるところでしょうか」。やがて、インタビューは核心に入り、通訳者の表現力が必要になる。取材対象者の答えが怒りであれば、それがどんな怒りなのかをディレクターが正しく理解しないとつぎの質問はできない。取材対象者とディレクターがお互いの気持ちを正確に理解し、共感することでインタビューは成立するのである。

あるディレクターは、韓国の大女優のドキュメンタリーを半年かけて撮影したが、もっともたいせつなインタビューでは日本人通訳者を選んだ。決して本心を語るまいと決めている女優の心にどこまで迫れるかがこの番組の要である。結果的にインタビューは複数回行われた。最初は韓国人通訳者にお願いしていたが、どうしても核心に迫ることばが聞き出せずに撮り直しをしたのである。最終的には日本人通訳者で成功した。しかもこの時は、2人の日本人通訳者による同時通訳である。この場合、逐次通訳で生じる「間」までもが障害となっていたのである。

### (3) トラブル、困ったことについて

通訳に関するトラブルで共通するのは「意識」である。この問題は、取材対象者のインタビューを収録するロケで、取材対象者の発話内容を日本語に通訳するときにかかる。テレビは、取材対象者のことばを収録し、数10秒から数分間VTRから取り出して使う映像メディアである。だからこそリアルに物事を伝えられるのであるが、通訳者が意識してしまうと、ディレクターは取材対象者が、通訳者が使ったことばを発話したと誤解してしまう。しかし、じっさいにそのことばは発話されてはいないのだ。

たとえば、取材対象者が「頼まればね…」と発話したとする。それを、通訳者は、前後のコンテキストをふまえて「頼まれば、また挑戦してみたいそうです」と訳す。この訳は、前後の会話からみて正確な訳かもしれない。しかし、ディレクターが後日「また挑戦してみたいです」ということばを抜き出して使いたいと思っても、VTRのどこにも存在しないという現象が起きる。しかも、優秀な通訳者の力で円滑に仕事が運ばれた場合にこそ起こる問題でもある。

これは、明らかに、ディレクターの意図や質問を、コンテキストを含めて理解して通訳することが望ましいという今まで述べてきたことと矛盾する。しかし、ロケをするテレビ番組のインタビューの時だけは（生放送番組の逐次通訳、同時通訳の場合は「意識」することが時には重要であることもあるが）、じっさいに発話されたことばの「直訳」であることが必要である。しかも前節で述べたとおりに、発話者の「ことばに込めた空気」までもが表現さえも含めて再現されているというたいへん高度なものが要求される。

経験豊富な優秀な通訳者のなかには、通常のロケではコンテキストを読み意識するが、取材対象者の話を収録するインタビューの場合だけは、取材対象者の発話だけを直訳するというテレビロケ独特のテクニックを使い分ける人もいるそうである。

#### (4) 通訳者にもっとも必要なものはなにか（複数回答）

##### • コミュニケーション能力 4

（生活階級<sup>1</sup>を超えた万能なコミュニケーション力、コンテキストを読む力、天性のコミュニケーション能力、発話の意図を理解する鋭い勘、発話の意図を理解する力）

##### • 語学力 1 • 頭の回転の速さ 1 • 人間力<sup>2</sup> 1

回答をまとめると、通訳者にもっとも必要なものはコミュニケーション能力であった。ここには、コンテキストを読むという能力も含まれる。コーディネーターという特殊な通訳者であることも考慮に入れなければならないが、ここでいうコミュニケーション能力とは、他者とつながる力そのものをさしているように感じられた。相手を理解し、相手の考えを受け入れる、人としての奥行きのようなものではないだろうか。人と人とを直接つなげる役割であるからこそ、通訳者が扱わなければならないのは「言語」だけではなく「人の心」も含まれるのである。

## 4. 通訳者を生かす技術

言語には、民族などの社会集団の文化が深く反映されており、異なった言語間でことばの単純な置き換え作業はできない。ところが通訳者を必要とする発注者のほとんどはこのことを認識していない。発注者は、通訳者を介せばどんなことでも発話した日本語が自分の思ったとおりに対象言語に「変身」と考えてさえいる。そのために事前の打ち合わせも知識も資料も必要ないと思ってしまう。通訳者さえいれば言語・文化のギャップはなくなると考えており、その仕事の困難さを発注者は想像していないのだ。しかし、通訳者にプロの仕事进行を要求するのであるならば、発注者もプロでありたい。通訳を成功させるには、発注者と通訳者が意思の疎通を図ることが必要である。

そのために発注者と通訳者が目的を共有することが求められる。インタビュー、打ち合わせ、商談が何を目的として行われるのかを発注者は通訳者に詳細に説明し理解してもらわなければならない。一口に商談といってもいろいろある。契約成立までこぎ着けたいのか、値段交渉までなのか。インタビューに関しても、何をどこまで聞きたいのか、といった目的を明確にし、情報を共有しなければならない。通訳者は目的を共有できて初めてスタートラインに立てるのである。

また、日本語は「主語」を省略することが可能な言語である。発注者が主語を省略しても通訳者は主語を補っている場合が多くある。日本人同士であっても微妙なニュアンスの問題で、主語

が何なのか、あいまいになることは間々あることだ。また日常生活では、わざわざ発話しなくても、いわばコンテキストで通じることが、通訳者の介在する異文化間コミュニケーションでは、すべて発話するほうが誤解も少ない。話している途中で違う考えが頭をよぎったり、結論を変えたくなったりすることはよくあるが、挿入句を多用せず簡潔な文章にするほうが通訳を行いやすいはずだ。

## 5. まとめ

今回のインタビューで気づいたのは、ディレクターたちはかなりの回数、複数の通訳者と仕事をしていながら、通訳者に望むべき姿を整理してはいなかったことである。それは通訳者が発注者と関わる時間の短さに主に起因する。ロケの場合は、長くて1カ月、時には数時間で済むことすらある。仕事では当然お互いに不平も不満もあり、議論を深めることもあるのだが、仕事が済めば、再度同じ国で、同じ通訳者と仕事をする機会は少なく、その場かぎりのこととして忘れてしまうことが多いからであろう。これは発注者にとっても、通訳者にとっても不幸である。短期間の仕事で2度と会うことはないという環境のなかでは、ディレクターの意識改革も、通訳者の技術向上も望めない。

「通訳翻訳特論」の講義を通して、初めて通訳者の役割を認識し、その仕事の奥深さと難しさを理解することができた。そして同時に通訳者の立場で考え、発話することによって仕事も円滑に進むことを経験した。今後は、通訳者に依頼する側の「心得」や「知恵」「技術」といったことを整理し考察しながら、通訳者を介した仕事がより円滑に進む方略をさらに研究していきたいと考えている。

## 註

- 1 回答者によると、ある「階級性」(階層性)の高い地域を取材したときに、現地コーディネーターが取材対象者によって態度を変えてしまうため取材が滞ったことがあるという。この回答者の言う「生活階級」とは、社会階層、あるいは社会集団のことをさすと思われる。
- 2 回答者によると、「人間力」とは、コミュニケーション能力や行動力など、人として生きる力のことを意味する。

## 参考文献

- 井出祥子 (2006). 『わきまへの語用論』大修館書店.  
 石井 敏・岡部朗一・久米昭元 (2005). 『異文化コミュニケーション』有斐閣.  
 鳥飼玖美子 (2001). 『歴史を変えた誤訳』新潮社.